

各国農業普及事情の比較分析 <その 2>

普及員の技術力

当シリーズでは、各国の普及事情について、社員間で意見を交わして、記事を作り上げている。今回のテーマである技術力について、まず知識、実技、企画力、研修の機会などの切り口から各国の事情を比較検討した。その結果、我々が携わった国の普及員の多くは、大学で習った知識はあるが、現場で役に立つ知識や実技に乏しいという共通点が見つかった。そのため、我々が携わったプロジェクトや JICA つくばの技術研修では実践的な知識や技術が習得できるように工夫してきた。実際、我々の研修を受けた普及員からは「自信を持って農家圃場に行けるようになった」という話はよく耳にする。したがって一般的に「技術力が高い普及員」とは、「農家を指導できるだけの十分な知識や技術がある普及員」だと考えることができそうである。

しかしながら、普及員が現場に出ると、多様な問題に直面する。作物生産だけでも、穀物、野菜、果樹と品目は多様であり、そこに水管理や施肥技術、病虫害管理、収穫後処理、マーケティング、ときに畜産分野にも携わらなければならない。これらすべての分野において「農家を指導できるだけの十分な知識や技術」を身に付けることは容易ではない。そこで次に我々がこれまでに出会った「できる普及員」、そして理想の普及員像について、自身の経験をもとに話しあってみた。いくつもの興味深い事例や普及員を巡る人間味あふれるストーリーについて言葉が交わされたが、以下に、特に興味深い事例を二つ紹介したい。

まずはスーダン国で携わった「リバーナイル州灌漑スキーム管理能力強化プロジェクト」である。当プロジェクトでは灌漑施設の運営管理をしながら、営農指導を進めていたが、指導する役目の普及員の数が足りず、また一人当たりの担当エリアが広いことから、農家圃場を頻繁に巡回することができなかった。そこでプロジェクトでは灌漑施設の運用に関わっていた灌漑管理員を研修

し、普及員を補助する役目を担ってもらうことにした。この際、彼らに課したのは農家を技術指導することだけでなく、農家圃場にある問題を吸い上げて、普及局



現場で農家と意見交換をする灌漑管理員（スーダン）

に伝える役目であった。最初はおぼつかなかった彼らも、場数を踏むにつれて、農家の問題に気付くようになり、適切に普及局と連携し、農家に寄り添う普及員として申し分のない働きをしてくれた。またウガンダのプロジェクトでも、はじめは普及員が発芽不良の問題を見つけると、農家と共に「種子が悪い」と決めつけていたが、プロジェクトスタッフと共に何度か現場経験を積むと、発芽不良の問題が本当に種子によるものなのか、播種や出芽後の管理に問題がなかったのか、を探れるようになってきた。

これらの事例を鑑みると、普及員に求められる技術力とは、専門的な知識・技術というよりは、現場の問題を探るための観察力、問題分析力、コミュニケーション能力といった総合的な現場力ともいえるものではないか、という考察に至った。また同時に、普及員がこういった幅広い現場力を身に付けるには、場数を踏むことが極めて重要であることもわかってきた。普及員たちは場数を踏むことにより、様々な問題に直面し、それにより新たな問題にも気付くようになる。また問題分析ができていれば、自分がわからなくとも、誰に何を聞けばよいのかが、わかるようになるようである。

それでは、現場の場数を増やすにはどうしたらよいのか、経験の浅い普及員は優秀な普及員とはなりえないのか？普及員のこれらの議論については、次号以降で取り上げることとする。